

M ● D E L

K A Z U K I H O R I K O S H I A R C H I T E C T U R E / P H O T O G R A P H S

M ● D E L

Preface	3
I . House in Yugawara <small>Design Thesis Feb. 10, 2017</small>	5
II . Building in Asakusa <small>Competition Oct. 2, 2016</small>	23
III . House in Kitazawa <small>Competition Jun. 30, 2016</small>	41
IV . Spy House, Sumiyoshi <small>Subject at master Dec. 2, 2015</small>	59
V . Bridge, Minamisanriku <small>Competition Jul. 19, 2015</small>	77
VI . Tomiura Students Dormitory <small>Subject at master Jul. 8, 2015</small>	95
VII . Building in Narita <small>Diploma design Mar. 1, 2015</small>	113
Bookmark	130

P ▲ A N

Credits	174
----------------	-----

序文

P r e f a c e

この本には、私がつくった模型たちが撮りあげられている。作品集をつくるにあたり、本来ならばイメージパースやドローイングといったアウトプットは欠かせない。けれども、そういった表現を本書でみられることは一切ない。というより意図的に排除している。私が設計し撮影した、建築の「模型写真」それだけだ。

* * *

私たちはとんでもなく性能の良いレンズを持っていることを自覚しているだろうか。それはもちろん、人間の目だ。人間の目は絞りで例えると非常に明るく開放 F1.0 程度だといわれている。加えて画角は 24 mm、これはだいたい人がボケーっとしているときの画角である。最大では 12mm、超広角だ。また、ISO と呼ばれる「弱い光に反応する感度」の値は、カメラと比較して夜間はおおよそ 600 倍にもなるという。

こうして見ていくと、ふと疑問に思う。ならばなぜ、私たちは写真という媒体を通して被写体を納めるのか。実は私たちが目で見ている映像は本来、本当の風景ではない。水晶体を通して網膜に投影された映像を一度脳が処理して、色彩感度良好な状態へ常にレタッチ（色調補正）してくれているのである。それを裏付けるように、例えば暗室から明るい外を見るとき、私たちは室内外の風景を同時見ることができるだろう。しかし同じ風景を写真に映したときに気付く、ピントによっては明るい部分は白飛びし暗い部分は黒潰れする。ときにはホワイトバランスも目視とは異なっているはずである。

つまり写真とはそのとき一瞬の光を閉じ込め、本来の“空気”を映し出す。その価値は測りしれない。なぜならこうして目で見ている世界とは同時並行的に、まるでパラレルワールドのようにレンズ越しに見える、もう一つの世界があるともいえるのだ。

本書で掲載している建築模型は、いうまでもなく、全てアンビルドである。だからこそ私がもう一つの世界で映す、模型という抽象表現を超えた“空気”を感じてもらいたい。撮影場所はどれも同じなので、違っているのは光環境だけである。また、より現実世界に近づけるため人間と同じ視野角の 24mm レンズのみで撮影されている。願わくば、模型写真を見てふと意識がジャンプするようなことがあれば、目論見通りなのだが。



H O U S E I N Y U G A W A R A

Design Thesis | February 10, 2017

私は住宅を設計した。わりと普通の背格好だが、なんだか少し気持ち悪い。「あの部分は一体何だ?」と疑問符がつくような、それでいて地域の愛着を一身に受けている奇妙な住宅である。

私が行ったのは、<建築の「構成材」を別々のしかたで設計し、一つ一つに固有名詞を与える>というものだ。すなわち、ここで設計され名付けられる「構成材」たちは“壁”や“梁”といった単純なものではなく、新しく個性の与えられた、ある特定の機能を有する意味深なオブジェクトなのである。

本設計は建築を構成するエレメントを一品生産のプレファブ化とも言えるしかたで作り、組み上げ、地域という具体的な敷地に着地させ、全体性を獲得するまでを描いた試論である。

#01

湯河原の家

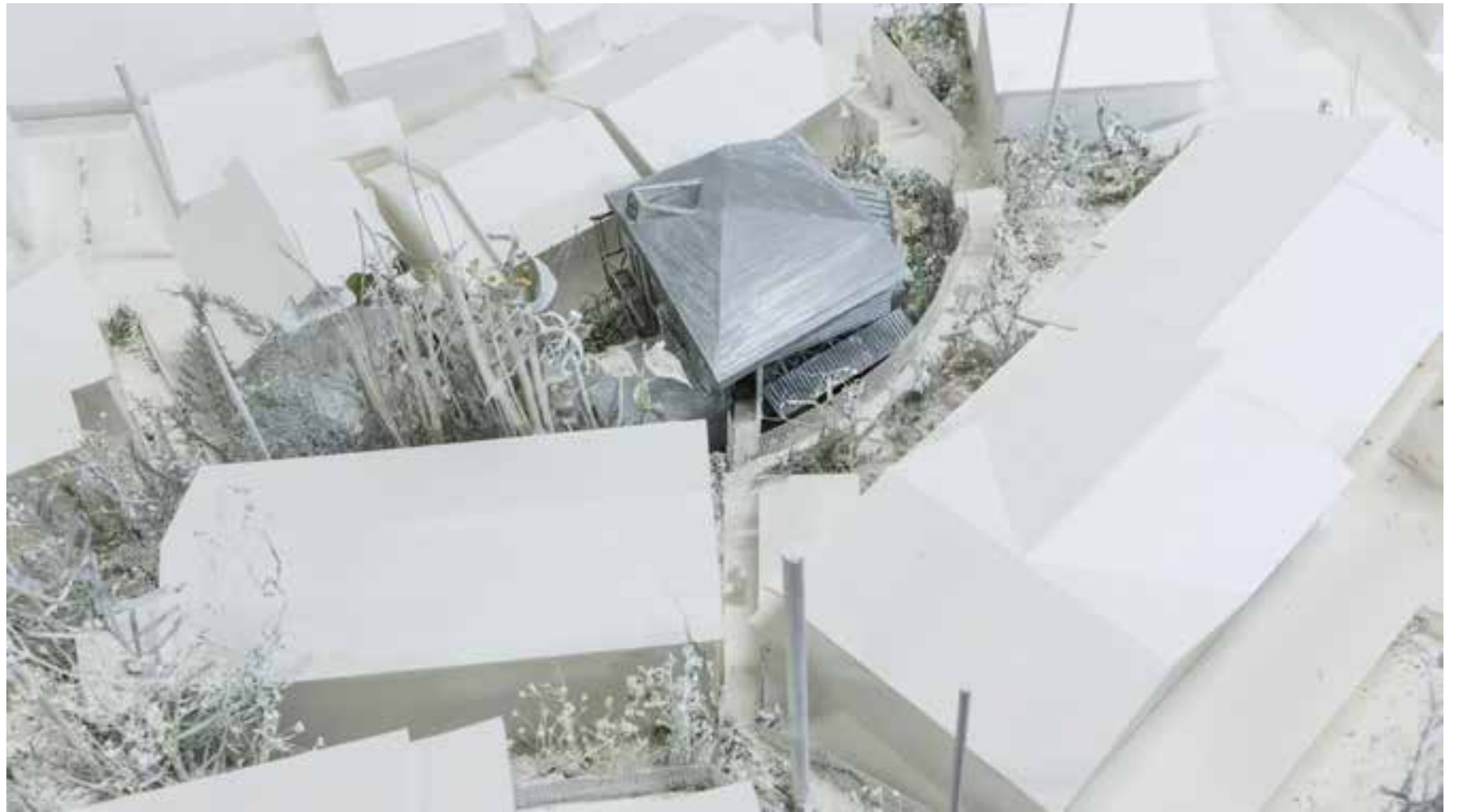




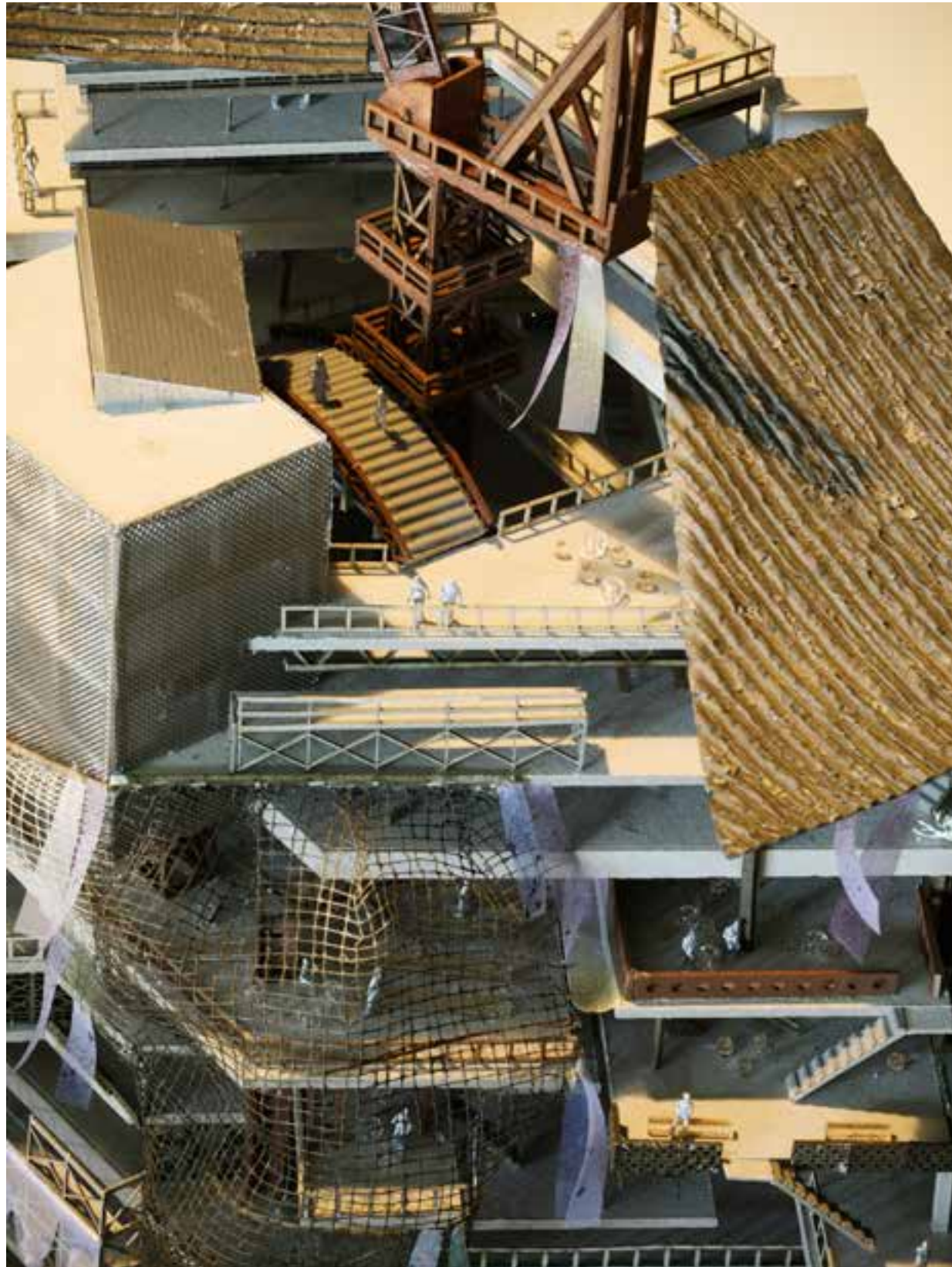












B U I L D I N G I N A S A K U S A
C o m p e t i t i o n | O c t o b e r 2 , 2 0 1 6

人々がサグラダ・ファミリアに惹きつけられる要因はフォルムの有機的な造形美だけでなく、「建てること」そのものが様々な付加価値を生産しているからだを考える。

「建てること」は一つの大きなイベントであり、スペクタクルであり、アトラクションである。そのダイナミクスには、人々を呼び寄せる力がある。「建てること」は多くの雇用を生み、ヒト・モノのネットワークを形成し資本の循環をつくる。

建物は、完成した瞬間から朽ちていく存在だ。しかしこの建築は「ずっと造り続けられていく」のである。行くたびに、見るたびに最新の状態へとバージョンアップされている。建築を仮囲いのくびきから解放し、建築が本来持つ起源^{origin}を復活させる。本提案はサグラダ・ファミリアが有する構造的側面、“祝祭性”と“産業化”この2つに着目し、ここ浅草で構築することを目指す。

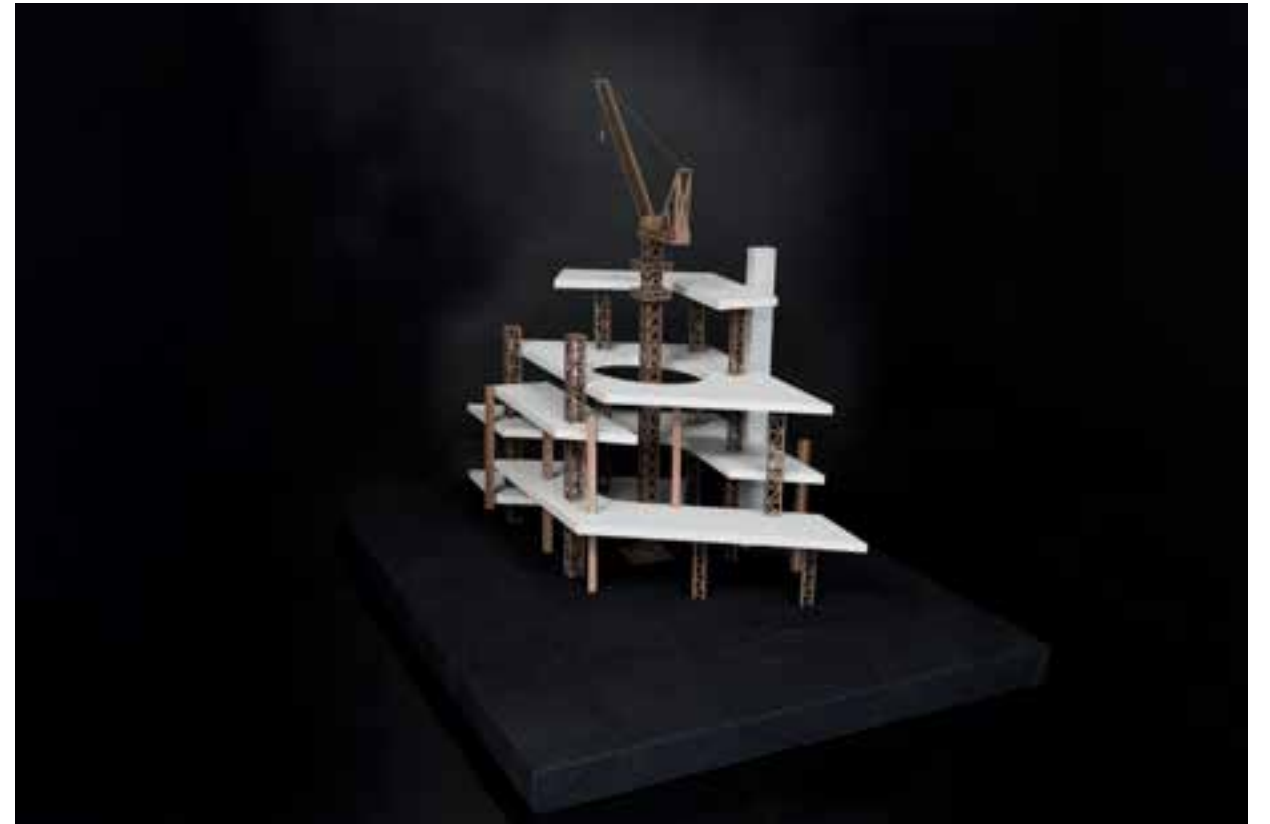
#02

浅草のビル



















H O U S E I N K I T A Z A W A
C o m p e t i t i o n | J u n 3 0 , 2 0 1 6

路地と斜面。たち並ぶ木造2階建。豊かな緑もまだ残っている。
狭くてかなわん！というような感じで道路にはブランターや自転車
がはみ出し、塀から木々もはみ出してモサモサと元気に育っている。

計画地付近の風景はそんな、生活の領域が敷地の外側まで広がっ
ているような豊かさと力強さを持っていた。既存の街並みに学び、
周囲の環境とともに暮らせるような住処を、路地に面した傾斜地
における生活の枠組みを、建築的に再構築する。建物のボリュームを
東側に寄せ、片側にできた大きな空地に魅力的な小径こみちを計画する。
これが提案の骨格となる「建ち方」のアイデアだ。これにより、上
下に分断された街並みに“脈絡”を作り出すとともに、小径こみちととも
に暮らす新しい住まい方を提案する。

#03

北沢の家



















S P Y H O U S E , S U M I Y O S H I
S u b j e c t a t m a s t e r | D e c e m b e r 2 , 2 0 1 5

1973年。安藤は、マニフェスト「都市ゲリラ住居」において、
メタボリズムの蔓延の世界を否定し矩形の箱に小宇宙^{ミクロコスモス}を追求した。

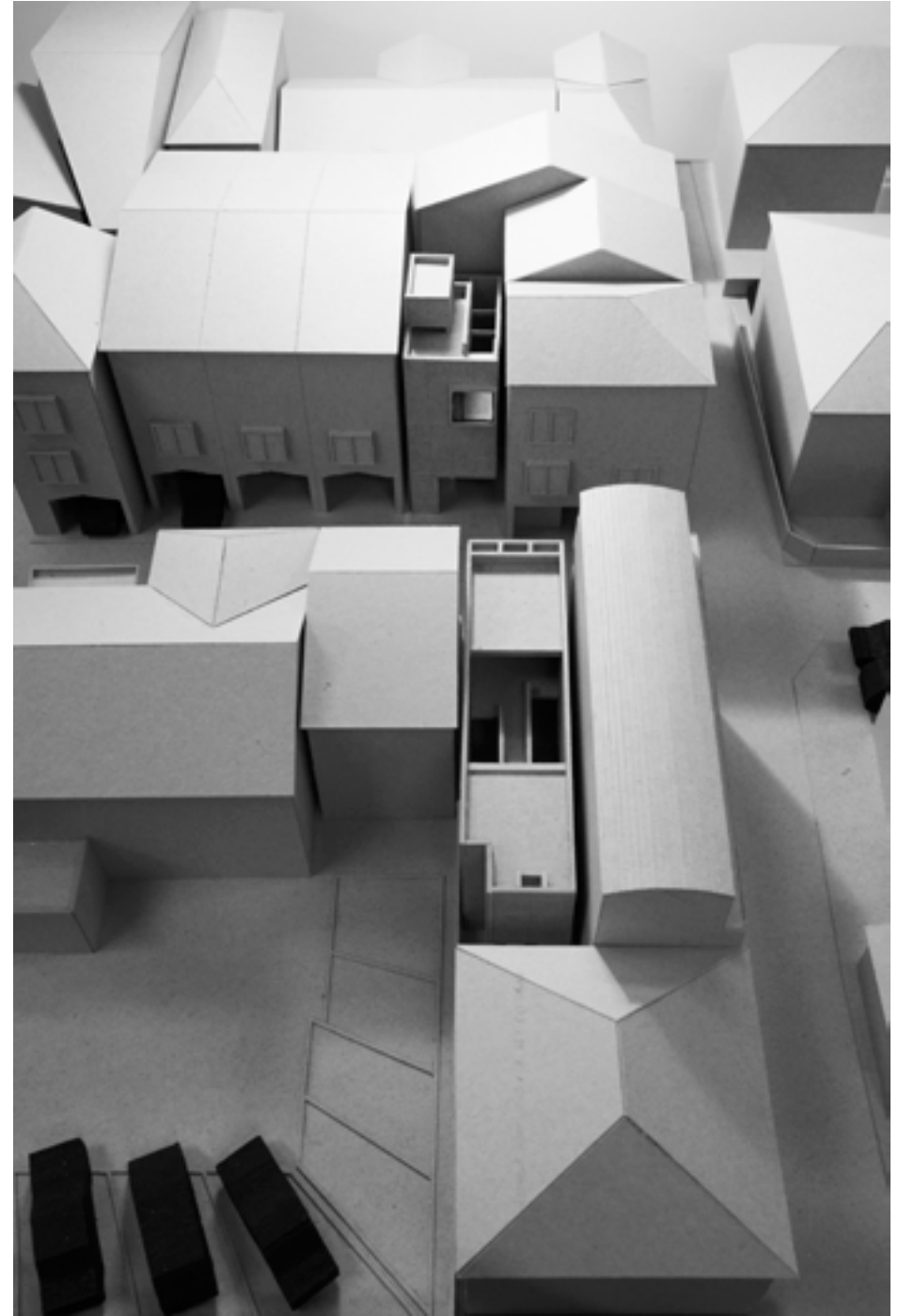
2015年。かつて、伝統的構法による長屋町が形成されていた木
密地域は、現代法規によって整理整頓され、車庫付き三層のRC密^{コンクリート高密集地域}
へと姿を変える。“建蔽率許可制度”これを新たな敵と定め、都
市認識と巧みに乖離させることで成り立つ「都市スパイ住居」は、
現代においていかなる意味をもちうるか。

奥行5間を真っ二つに切断し、生活は地下-建築限界10mに至
るまでファサード側で全て完結する。回避不能な車庫によって決定
された強靱な断面形式と、内部空間の裏切りは、いかに容積率を無
駄にし、法規を愚弄するかに徹している。言うなれば「都市スパイ
住居」は、騙された都市生活者のアジトが、独立住居の存在を意味
づける論理を包摂している。

#04

住吉の隠屋



















B R I D G E , M I N A M I S A N R I K U
C o m p e t i t i o n | J u l y 1 9 , 2 0 1 5

数十年後、南三陸が復興しても尚、人々と津波を結びつけることが重要であるとする。復興計画が整い荒廃した大地が美しく生まれ変わったとしても、この町を訪れる人々が「震災」と「津波」を意識することは、多くの被災者やその親族に哀悼の意を表すことに他ならない。復興という眩い町の未来には豊かさだけでなく、遺構としての“記憶”が必要であると考えた。

私は南三陸を襲った脅威「最大津波到達高さ T.P+15.9 m」に橋というスケールを与える。震災直後の大地にあっけらかんとして立つ朱色の鉄骨躯体、町を飲み込んだ津波到達高をフィーレンディールのエレメントとして抽出し橋へと昇華させた。

#05

南三陸 復興の橋



















T O M I U R A S T U D E N T S D O R M I T O R Y

S u b j e c t a t m a s t e r | J u l y 8 , 2 0 1 5

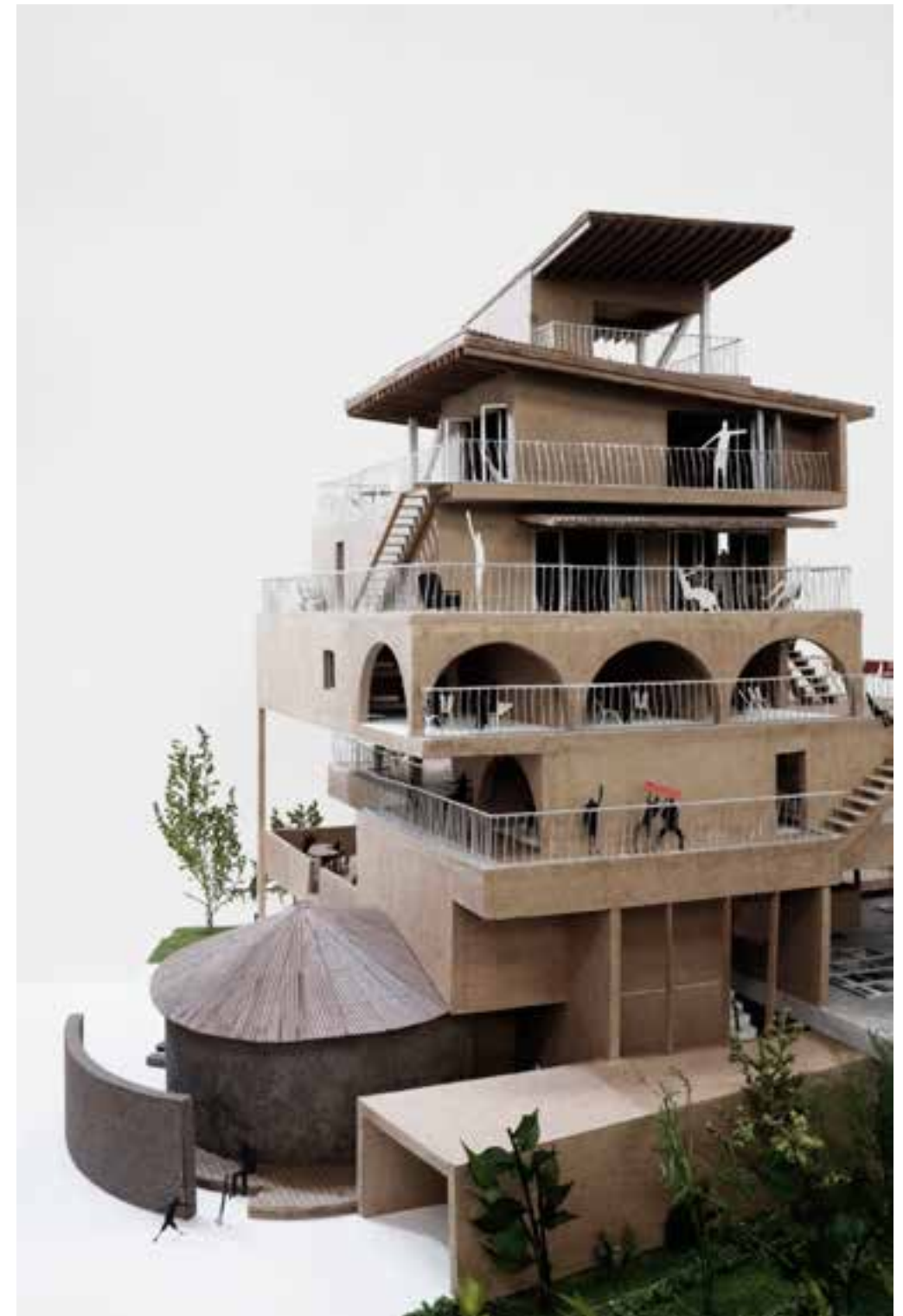
内房に面した温暖な気候で知られる千葉県南房総市富浦町。この場所に、小学校行事として使用される臨海宿泊施設を計画する。

この寮は小学4年生～6年生が臨海学校の拠点として利用する、いわば非日常の舞台である。しかしながら、ここでの寮生活は（過剰な言い方をすれば）軍隊のようであった。生徒は先生に服従し分刻みのスケジュールによって自由時間さえままならない。例えば、風呂は一人30秒。私語は厳禁。絶対整列。しかしそれらは、「遠泳」という特殊なプログラムから引き起こされる“全体行動の質を向上させるための手段”に他ならない。加えて、生徒たちはほとんどこの寮を使用しないのだ。

限られた日程、自由時間さえ無い特殊なプログラムを持つ寮に対し、子供たちにかげがえのない思い出を残す「経験値としての建築」を提案する。

0 6

富 浦 寮







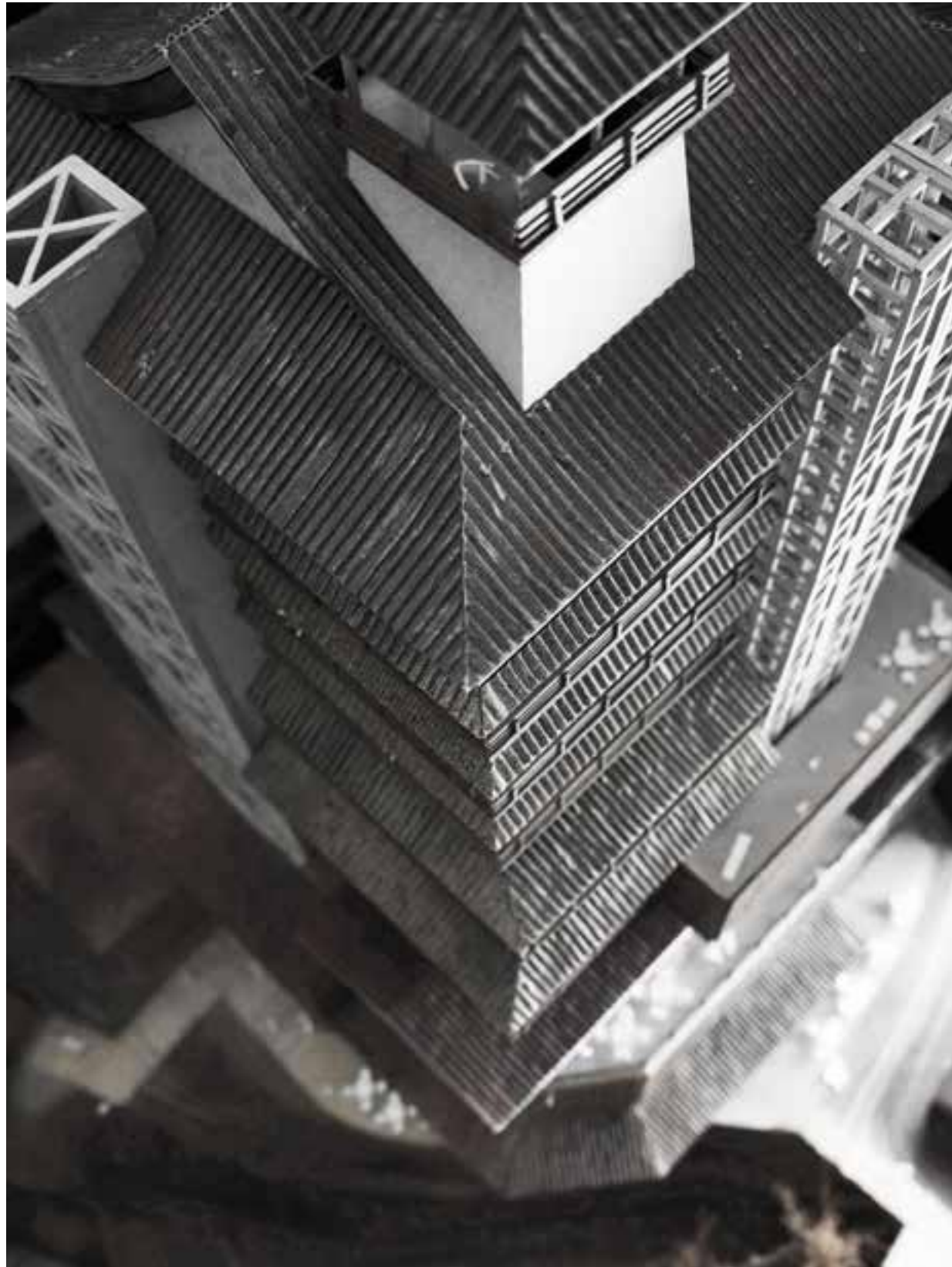












B U I L D I N G I N N A R I T A

D i p l o m a d e s i g n | M a r c h 1 , 2 0 1 5

千葉県成田市門前町。1978年、成田国際空港が開港し日本が世界へ踏み出した300年前より、都市を支えてきた門前町が成田には存在する。成田山新勝寺に構える門前町は江戸期より繁栄した約1kmに及ぶ坂と七つの町の境界を経た表参道である。

鉄道の施設にはじまり、空港建設、三里塚闘争、激動の時代を生きてきた門前町。先、成田が国際都市へと進撃することは避けられない。周囲にはホテルや商業ビルが林立し、盆地に位置するこの町はしだいに寂れていくのだろう。この町は我々の誇りである。

本提案は国際都市＝宗教都市におけるオフィスビルの「建ち方」に異議申し立てをおこない、大本山成田山新勝寺眼前に超高層建造物のオルタナティブを提案する。

#07

成 田 の ビ ル

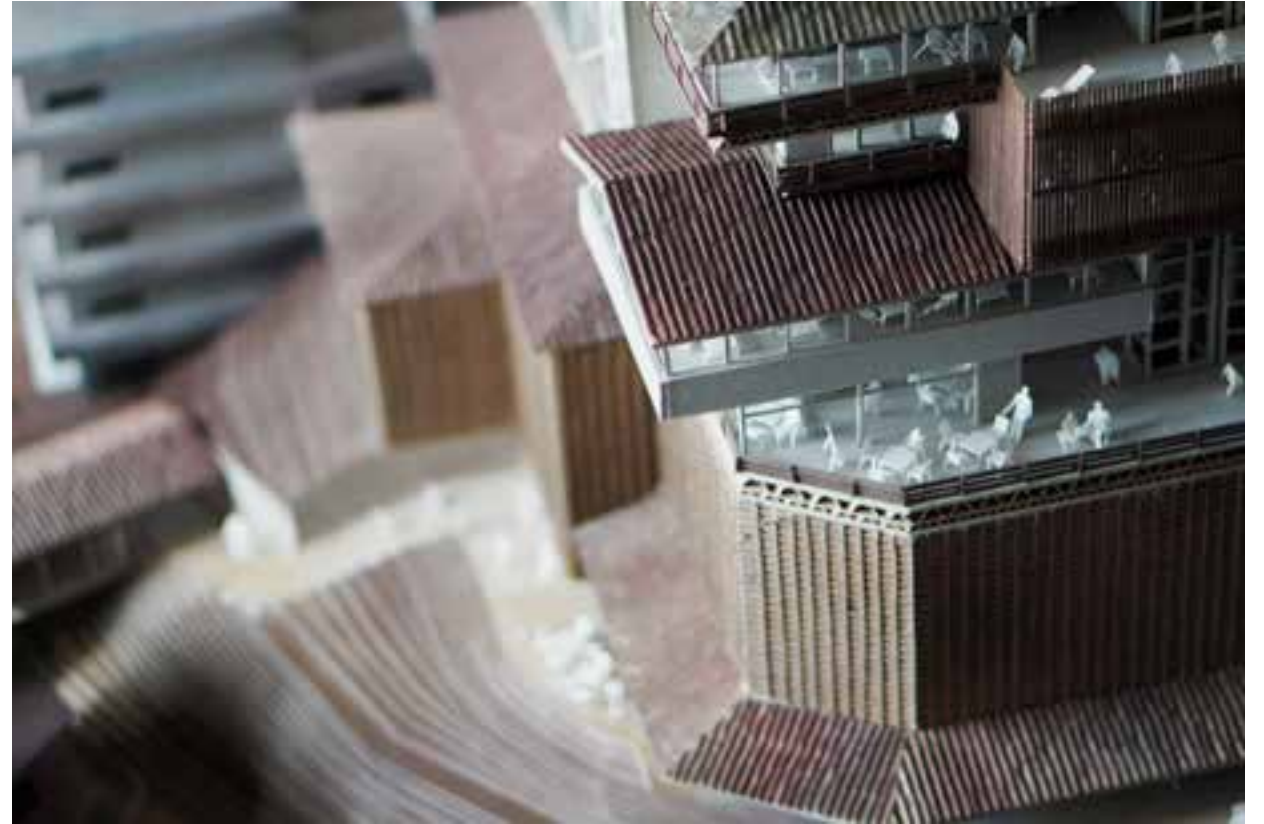
















栞

Book mark

この本に掲載されている作品は、私の卒業設計から修士設計までの二年間を時系列順にまとめたものである。こうして眺めてみるとある共通した意識というか、感覚というか、幼い頃からこれまでの経験が、模型を通して語りかけてくる。そんな気がしてならない。

宮大工である私の祖父は建築士の免許も持たず、持ち前の勘と腕前で自分の家を3、4倍に増築してしまった。その半分以上は半屋外で、切妻の倉庫のような作業場である。もちろんコンクリートは使えないので代わりにコンクリートブロックを、朱色の鉄骨を、何十種類もの木材を、外景からは全くわからないけれど、ハイブリットさせて大空間を造ってしまった。構築的な感性も材質に関する理解も、流石の職人である。

私がイメージする空間の湿度やディテール感覚といった趣は祖父の手癖（もはや力の流れがわからない構築のしかた）を起源としていたことに改めて気が付かされる。注視すると意味が分からないボルトやビス留めだったり「なんでそこだけ」とツッコミを入れたくなる。気にならないけれど快適な、少し薄明るい“空気”の感覚が、私のなかに意識せずともあったのだ。

あらためて模型を見てみても、一貫して“部分”と“全体性”を趣に置いていたように思う。建築とは、いうまでもなくありとあらゆるパーツの集合体、その結節点にあるといえる。よりミクロな視点で見れば、一つ一つのパーツには必ず考案した作り手がいて、専門とする職人がいて、切り出された母材とその産地という、ネットワークの終着点に在ることに気が付く。私は新素材がどうか、先端技術がどうか、どうでもよくて、これまでの建築のパーツ（例えば雨樋や柱）がどういった経緯で使われ、どうしてその形状で、なぜ普及しているのか。モノが培われた「原理」そのものに興味がある。モノというのは面白くて、100年前に考案されたとしても、名前は同じで現代では異なる使われ方をしていたりする。先人が改良を加え、形を変え生き永らえてきたこの“読み替え”のプロセスに、私は現代（の新しさ）に通じる可能性を感じるのだ。しかし厄介なことに、いくら“部分”に時間を費やし思考したところで、建築にはいつでも“全体性”

がつきまとう。つまり最終的にはひとつに統合しなくてはならない。そこで私が目指したのは<“部分”が突出しながらも“全体性”を獲得する>という言葉化するとまるで矛盾した、アンニュイな建築の「建ち方」をなんとか実現できないかと考えていた。一連の模型を見てみても、基本的に構造はハイブリットで異種部材の勝ち負けと組合せのしかた、そして最終的に現れる「建ち方」とのスタディをプロジェクトは違えど試行錯誤していたように思う。もちろん、一体どうつくるかという施工側の解像度もふくめて。

「建ち方」を思考する一方で、仕上に対する興味も尽きなかった。というより、逃げたいと思ったのだ。モダンに白で塗りつぶし、モノ同士がもつ価値をキャンセルするのではなく、模型には可能な限りあらゆる仕上を考慮し着彩を施した。粒子の粗密、他材との駆け引き、木材の種類など考えれば興味が尽きない。しかし、重要なことである。白模型とジオラマ模型とでは我々が受けるイメージは決定的に異なるように、常に“抽象化された模型”という媒体を超えて、その先の現実世界にまで目を向けるようにしていた。「近代建築は白なのだから」という迷信が私たちの思考を狭めてしまっている。事実ル・コルビジエはラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸の仕上げに白ではなくベージュを塗った。サヴォア邸にはどぎついオレンジが、ピンクが、ブルーがまるでキャンバスに塗りたくるような絵画調に仕上げられていることをご存知だろうか。要するに空間に対する「疑い」と「裏切り」。そのことを常に頭にいれて設計を行っていた。

私は設計に則して、スケッチはほとんどせず、スタディ模型と呼ばれる検討模型をいくつも作って並べたりもしない。基本的にたくさんつくるのは面倒臭いので、ひとつの模型をずっとあーでもないこーでもないと納得いくまで切り張りし続ける。そのたびに選択肢が消えていくので昔の案に戻ることもできない。正直、非常に効率が悪い。わかっただけだけれど、まるでセルフリノベーションのようにスタディする手癖がどうやら染みついてしまったらしい。なんとも厄介な癖を受け継いでしまった、ほとんどパズルゲームに近いと思う。パーツの足りないプラモデルを完成させずにつくり続ける感じ。ある審査員に、設計がオタクっぽいと言われたが今は誉め言葉と捉えておくことにする。